



復帰と文芸

大城 貞俊・選

(詩人・作家)

『小説 琉球処分』大城立裕（1968 年、講談社）

日本国と清国の間に翻弄される琉球王国の人々の苦悩を描いた作品だが、沖縄の歴史を顕示し現在に繋がる射程をも有している。沖縄初の芥川賞作家となった大城立裕による、沖縄を生きた作者の記念すべき一冊だと言えるだろう。



小説 琉球処分

『オキナワの少年』東峰夫（1972 年、文藝春秋）

復帰前の過酷な米軍統治の時代を少年の眼から描いた作品。「沖縄」から「オキナワ」へ変貌する父祖の土地を嫌悪し、無垢な少年がオキナワへの憎悪をたぎらせる少年へと変貌する。作品で使用するシマクトゥバも話題を呼んだ。第 66 回芥川賞受賞作品。



オキナワの少年

『ギンネム屋敷』又吉栄喜（1981 年、集英社）

芥川賞作家である又吉栄喜による初期代表作の一つ。戦争の記憶に^{さいな}苛まれる韓国人やウチナーンチュを登場させながら、戦争で傷ついた人間性の回復が困難で不可能であることを示した象徴的な作品。第 4 回すばる文学賞受賞。



ギンネム屋敷

『水滴』目取真俊（1997 年、文藝春秋）

沖縄戦の記憶の継承の仕方への警鐘である。記憶を改変し捏造していないか。足がスブイ（冬瓜）のように膨らみ親指から水滴が垂れるシュールな手法を用いて現在の沖縄を鋭く問いかけた。第 117 回芥川賞受賞作品。

水滴

『^{ひこく}沖縄の悲哭』^{ひこく}牧港篤三、^{儀間比呂志}（1982 年、集英社）

従軍記者として沖縄戦の戦場を彷徨^{さまよ}った牧港篤三の視点から紡^{つむ}がれた言葉が胸^{えぐ}を抉る。戦争を生きることは「生命の曲芸だ」とした作者の沈痛なレクイエムとなっている。版画は生涯にわたり沖縄を描き続けた儀間比呂志による力強い作品。



沖縄の悲哭

『蚊帳のホタル』^{仲宗根政善}（1988 年、沖縄タイムス社）

「ひめゆりの学徒」を引率して戦場を彷徨^{さまよ}った作者の鎮魂の思いを短歌に託した歌集だ。体験者の悲しみは人間の根源的な悲しみに昇華され、生きることの意味と責任を問い続ける姿勢には戦争の悲惨さが浮かび上がってくる。



蚊帳のホタル

『沖縄俳句総集』^{野ざらし延男}編（1981 年、野ざらし延男）

戦前から戦後までの県内、県外、海外までの物故者をも含む作家の俳句作品を網羅した画期的な大著である。収載者数 308 人、収載句数 1 万句を超える。巻末には「沖縄俳句年表」を掲載。一人の俳人による俳句への愛情、情熱がほとばしった著書だ。



沖縄俳句総集

『人類館』『沖縄の文学〈近代・現代編〉』^{知念正真}（1991 年、沖縄時事出版）

戯曲「人類館」は明治期の大阪万国博覧会でアイヌ人や台湾高砂族の人々と共にウチナーンチュを展示したという実際にあった事件を題材にした。沖縄やウチナーンチュへの差別を、強烈な風刺とユーモアで反転させた。



人類館

『新南島風土記』^{新川明}（1978 年、大和書房）

復帰前の西表、与那国、波照間、竹富、鳩間・・・スポットの当たることの少なかった離島を舞台にしたエッセイで、権力によって隠蔽される歴史や庶民の暮らしに丁寧に寄り添って描いている。強い共感を覚える一冊だ。



新南島風土記

『沖縄戦記 鉄の暴風』^{沖縄タイムス社}編（1950 年、沖縄タイムス社）

沖縄ならではの戦記で生死の境を歩いた人々の姿を描いた作品。初版は戦争の傷跡もまだ癒えぬ 1950 年。生存者から聞き取りを行い、住民側からの沖縄戦の記録としてもっとも早い時期に世に出た。その後も版を重ね、2001 年に第 10 版が出版された。



鉄の暴風